

今年、アカデミー賞脚色賞を受賞した映画『教皇選挙』の中で、枢機卿（カトリック教会の高位の聖職者）がこんなセリフを語っていました。

「確信」は団結の最大の敵であり、寛容の致命的な敵なのです。

…私たちの信仰が生きているのは、疑いとともに歩むからです。

もし「確信」だけがあって疑いがなければ、そこに神秘は存在せず、信仰も必要なくなるでしょう。

一般的に、信仰とは「迷わず信じること」「疑わないこと」だとされています。

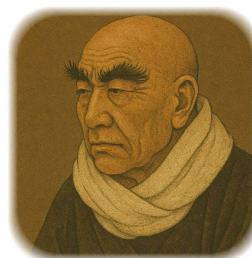
けれども、門徒さんの中で時おり、こんな声を耳にします。

「お経はよく唱えています、どこか確信が持てなくて……。」

「見てきた者のいない浄土に、本当に往けるのでしょうか……？」

こうした疑問が起こるのは、自然なことだと思います。

命の行方を思えば、人は誰しも迷うものです。



私たちの宗祖・親鸞聖人も、まさにその「迷い」や「疑い」のただ中におられた方でした。自らを「煩惱具足の凡夫」といい、「正しさ」や「確信」に立つのではなく、「それでもなお、念仏に救われる身」として歩まれました。

「欲も怒りも、ねたみも止まず、煩惱が満ちたまのこの身が、阿弥陀仏の本願に抱かれ、覚りの世界へと救われていく。」（『一念多念文意』より 意訳）

浄土真宗の「信心」とは、この私が「信じる力」を持つことではなく、「**信じる力さえおぼつかない私が、仏の側から支えられている**」ということです。

確信しきれない私でもいい―。迷いがあっても、疑いがあっても、そのまま抱かれている―。それがお念仏の救いです。疑いながらも歩み続ける私たちの傍に、そっと寄り添ってくださる仏が、阿弥陀さまです。

信仰とは、「確信」を持って完成された心ではなく、疑いを持ちながらそれでも歩もうとするところに、静かに息づいているものだと思います。

